

現行民法典を創った人びと（26）組織改編後の委員 3・4：小宮三保松・西源四郎、外伝21：閨閥

七戸，克彦
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/20230>

出版情報：法学セミナー．56（6），pp.62-64，2011-06-01．NIPPON HYORONSHA
バージョン：
権利関係：



現行民法典を創った人びと [26]

九州大学教授 七戸克彦

法学セミナー
2011/06/no.678

1 | 小宮三保松は、茨城士族・小宮久左衛門の長男、安政6年5月10日江戸生まれ。明治9年7月司法省法学校正則科第2期生入学。入学時の生徒課長(校長)・杉山孝敏の娘・安子と卒業年(明治17年)に結婚、卒業後は司法省御用掛(民事局詰)、19年2月欧州派遣司法官15名の一員として渡欧、プレスラウ大学に学ぶ¹⁾。

2 | 23年6月帰国後は、7月判事試補(東京始審裁判所詰)、8月検事(東京始審裁判所詰)となるが、岳父・杉山孝敏が長州出身の関係から伊藤博文に抜擢されて9月より貴族院書記官、24年6月枢密院議長書記官、25年8月第1次伊藤内閣の内閣書記官、11月法制局参事官となる。枢密院および内閣時代の書記官長は伊東巳代治で、枢密院時代には議長官邸で「三人共寡暮し、公〔伊藤〕が二階に住はれて伊東氏は階下の少し隔った室に私は公爵の真下に当る一室に居た、食事は毎度お茶屋から運んで来ると云ふ始末²⁾」。三宅雪嶺は「書記官長は巳代治、秘書係に三保松と云ふのがあり、妙に芸者の名前に似て居り、伊藤公を取り巻く芸者の如く」と例によって毒舌を吐いているが³⁾、先輩芸者・巳代治と反りが合わず26年5月の弁護士法施行を機に官を辞して弁護士となる⁴⁾。そんな小宮を不憫に思ったか、伊藤博文は井上馨に三井の顧問弁護士の斡旋を依頼している⁵⁾。

3 | だが、明治28年より再び検事に復帰(1月東京控訴院検事、31年7月大審院検事、11月東京控訴院検事、12月大審院検事)。法典調査会委員に任命されるのはこの時期である(31年2月9日)。32年4月改正条約の実施に際し運用上の万全を期すため欧米司法制度視察を命じられ⁶⁾、翌33年6月シベリア経由で帰朝⁷⁾。その後は足尾鉾毒兇徒聚合事件(大(2刑)判明35・5・12刑録8輯5巻105頁。裁判長は長谷川喬)の立会検事などで活躍。

4 | さらに、明治40年9月韓国宮内次官として韓国統監・伊藤博文の幕下に復帰⁸⁾、伊藤の死から韓国併合後の44年2月には李王職次官に就任。

5 | 大正6年1月退職後、12年関東大震災直後病床の折りに国文学に目覚め、その後は逗子駅裏手の山を開いた別荘・喜楽台で万葉集から記紀の本格的な研究に

没頭⁹⁾。金子堅太郎が序文を寄せた『記紀万葉単語』(1000頁)、『記紀万葉全詩註』(800頁)の出版を翌春に控えた昭和10年12月29日盲腸炎から腹膜炎を併発して死去(享年77歳)、結局上記大著は未公刊に終わった。

1) Rudolf HARTMANN, *Japanische Studenten an deutschen Universitäten und Hochschulen. 1868-1914*, Mori-Ôgai-Gedenkstätte, Berlin, 2005, S.178.ちなみに、ギールケは1871(明治4)年より同大学教授、1882-83(明治15-16)年には総長を務めている。

2) 小宮三保松「藤公と危難(承前)」法律新聞604号(1909年)21頁。

3) 三宅雪嶺『人物論』(千倉書房、1939年)299頁。

4) 法律新聞221号(1904年)22頁「小宮三保松君を評す」には、「当時伊東巳代治氏属僚間の牛耳を執り固く先進者の藩屏を持して相下らざる

あり君たるもの何ぞ官海的情実に慨する所なからんや、殊に君の養父たる杉山孝敏氏は身山口藩の重職を世々にして眼中固より伊藤博文なく唯一世の幸運児視して自重一世を盡ふの人、況んや巳代治をや愛婿を反噬するを見るに及んでは我心石にあらざるべからざる語気を洩らしたること蔽うべからず」とある。

5) 井上馨関係文書講義会『井上馨関係文書』所収伊藤博文書翰翻刻——明治15年3月から明治26年4月まで(参考書誌研究(国立国会図書

館)56号(2002年)15頁〔書翰34〕。

6) このときの遣外法官は、仏伊白3国出張者が河村善益(判事)・清水一郎(判事)、長森藤吉郎(検事)の3名、英米2国出張者が馬場恩治(判事)・香坂駒太郎(検事)・仲小路廉(検事)の3名、独奥2国出張者が小宮・棚橋愛七(検事)・斎藤十一郎(判事)の3名。

7) 小宮三保松「露国談」法律新聞1号-4号(1900年)。なお、小宮はドイツ留学時の知己・玉井喜作の情報を基にバイカル湖畔イルクーツクで日本人漂流民・阿部吉郎次の墓を発見している。

8) 日本弁護士協会録事112号(1907年)64頁「(時評)小宮韓国宮内次官」には、「資性洒脱にして而かも一種の気骨を有する大審院検事小宮三保松氏、今回韓国宮内次官に榮進して任に韓国に赴く、司法官より出て、宮内次官となる既に異数の任命なりと云ふ可し、氏は始めより職を司法部に奉して今日に至れる人、司法官としての手腕は我れ之を聞く未だ行政官としての手腕に至っては更に聞く所なし、然れども比較的交際の機会乏しき司法官の身を以て能く伊藤公に接近して其親任を受くるに至れる点より観察するときは氏も中々如才なき人物と見ゆ」とある。

9) 東京朝日新聞昭和10年4月22日夕刊2面。

〔組織再編後の委員③〕



小宮三保松

こみや・みほまつ (1859-1935)
法律新聞214号(1904年)1頁より。

1 | 西源四郎は長州藩士・西房至の二男、万延元年10月19日長府生まれ。上京後高谷竜洲の済美齋で漢学を学ぶ。同時期（明治11年頃）の在校生は中江篤介（兆民）、杉村文一（杉村虎一の弟で同郷（金沢）の先輩・島田一郎に与して11年5月大久保利通を紀尾井坂で刺殺した人）、右田豊彦（年英。日本画家）・寅彦（柳塙亭。劇作家）兄弟、長谷川辰之助（二葉亭四迷）と多士濟々である¹⁰。

2 | その後中国語を学んで16年8月外務省清国派遣留学生に選ばれるが、18年11月ベルギーに転ずる。翌19年2月1日の原敬（当時パリ公使館書記官）日記には「外交官養成の目的にて外務省より白耳義に留学生派遣の事となり、同国政府とも協定済にて、呉啓太、秋月左都夫、西源四郎等留学生として本邦より到着せり。此三人に松方正作外一名を加へて都合五名なり。井上〔馨〕の発意にて仏語に通ずる外交官を得んとの目的なりしなり¹¹」。一方、郷誠之助によれば「当時〔明治23年〕ブルッセルには、外務省の留学生や軍人が沢山ゐた。松方正作とか、田中阿歌麿とか、西源之助〔源四郎〕、それに伯爵久松定謨、島川文次郎、青木宜純、佐藤要之助などが居た。そこへ時折秋山好古がやって来た¹²」。

3 | 明治26年行政博士号を取得して帰国後は6月外務省試補から11月外務省参事官となり、12月22日伊藤博文の二女・朝子と結婚。翌27年9月「日本新聞」論説に検閲を加えた越権行為で罰俸1か月に処せられるが¹³、12月26日法典調査会委員。30年4月ドイツ公使館書記官に赴任して委員を離れ、32年3月オランダ公使館書記官、36年3月オーストリア公使館書記官。その後も大正4年4月シャム特命全権公使、11年3月ルーマニア特命全権公使。晩年は郷里の長府で病氣療養、昭和3年1月10日脳溢血にて死去。享年65歳。

4 | 父・西房至は幕末西洋かぶれの英国密航者・伊藤博文の命を付け狙った男であり、その息子に娘を嫁がせた伊藤も剛腹な男ではある。だが、娘婿・源四郎はいかにも影が薄く、法典調査会では一度も発言していない。仁井田益太郎は「三浦安氏、伊藤さんのお婿さんの西源四郎氏は純粹の法律家ではないので、聴き役であるけれども、そんな人とか、それから後に大審院長をした南部甕男氏。斯う云ふやうな人達は一度も意

見を述べた事は無いのですけれども、是等は大切な人でして、あゝ云ふ人々が納得する様な意見が出ないと通りません¹⁴」と優しいが、鵜崎熊吉（鵜城）は「彼れ初め末松〔謙澄〕夫人生子と婚して後ち白耳義に留学す。不在中末松は英国より帰朝し劍橋大学出身の俊才として名声噴々たり。時恰も政府は条約改正の爲め愚かなる欧化政略を行ひて一代の人心を歌吹海〔歌舞・遊興の盛んな場所。遊里〕に投じ、妙齡の淑女にして独身官吏と往来して巫山戯廻るの状、英国のサツフリゲート〔Suffragettes〕よりも甚だしきものありき。当時の生子女史は今の本野、牧野夫人〔本野一郎夫人・久子、牧野伸顕夫人・峰子〕等と俱に欧化婦人の急先鋒と称せられし丈けに、本夫源四郎を棄て、末松と自由結婚を行へり。是に於て伊藤は西の情を憫み配するに今の夫人朝子を以てしき。庸劣西の如きは多くを語るに足らず。唯だ末松の囊に内相通相となり一時政界の寵児たりしに反して、伊藤の死後全く振はず、恰も河童の水に離れたると同様なる、是れ即ち閨閥以外に何等自己を發展せしむるの力なき証で拠にあらざるや¹⁵」と容赦がない（ただし真偽のほどは知らない）。

5 | 偏屈な二葉亭四迷とは高谷塾時代に大激論して以来なぜか莫逆の友で、中国留学時には恋人同士のように長文の手紙を往復していた¹⁶。なお、二葉亭の恩師・古川常一郎は西の義兄、一方、西の娘・清子の夫は外交官の藤井啓之助で、藤井の娘（西の孫）・悦子の夫が外交官から最高裁判所判事となった藤崎万里である。



- 10) 土屋元作「同窓同社の記」坪内逍遙＝内田魯庵（編輯）『二葉亭四迷——各方面より見たる長谷川辰之助君及其述懐』（易風社、1909年）上ノ4頁。
- 11) 原奎太郎（編）『原敬日記（第1巻・官界言論人）』（福村出版、1965年）85頁。
- 12) 『男爵郷誠之助君伝』（郷男爵記念会、1943年）194頁。
- 13) 読売新聞明治27年9月12日朝刊5面。
- 14) 「仁井田博士に民法典編纂事情を聴く座談会」法律時報10巻7号（1938年）25-26頁。
- 15) 鵜崎鵜城『明治大正人傑伝（朝野の五代閥）』（成輝堂書店、1927年）123頁。
- 16) 西源四郎「高谷塾時代の交友」前掲注10）上ノ8頁、太田黒重五郎「三十年来の交友」上ノ15頁、内田魯庵「二葉亭の一生——回顧二十年」下ノ165頁。

1 | 小宮三保松のプレスラウ大学留学時の在籍登録は岳父の氏《SUGIYAMA》でなされているが、帰国後の辞令では「小宮」に復氏している。離婚はしていないから養子縁組のみ解消されたもののようだが、その理由は不明である。小宮に限らずこの時代においては藩閥・閥閥・学閥・官閥・財閥を出世の足掛かりとするのがむしろ常道で、西源四郎のように閥閥(+藩閥)を活用できなかった者が無能扱いされる。

2 | ただし、当時のモラルに照らしても度を過ぎればやはり非難の対象となるのであって、その槍玉に挙げられているのは決まって渋沢栄一と穂積兄弟である。ここでは鶴崎鷺城の言を引用しよう¹⁷⁾。「学閥出身中に於て最初の閥閥記録を造りたる者を穂積陳重とす。伊予宇和島の産、初め入江某〔入江佐吉。穂積兄弟の父・^{しげのよ}重舒(重樹)の同僚¹⁸⁾〕の養子となり〔明治元年9月22日婿養子縁組。しかし陳重(呂次郎)は14歳、入江の娘に至っては長女5歳、二女2歳である¹⁹⁾〕、其資を以て五年間英独に留学し、帰朝後此鴻恩ある養家と絶ちて渋沢の佳婿となれり〔明治14年6月帰国の翌7

月に旧宇和島藩主・伊達宗城家令・西園寺公成より渋沢栄一の長女・歌子との縁談話を持ち込まれ、8月に見合、11月末に入江家との縁組を解消して渋沢家と結納、翌15年4月25日婚礼²⁰⁾。彼是我邦学界の耆宿なれども、国法学者としては現代の新智識より遠かる。唯だ大学教授に不相当なる生活を為し、何程か朝野の間に重んぜらるゝは背後に渋沢を控へ、又一は兄玉源太郎の女を迎へて息重遠に配し〔長男・重遠は明治41年10月9日兄玉の三女・ナカ(仲子)と結婚²¹⁾。なお、兄玉の四女・モトは藤田嗣雄(藤田嗣治の兄の憲法学者)、五女・ツルは木戸幸一(最後の内大臣)に嫁す〕、寺内とも姻戚の関係〔寺内正毅長女・サワは兄玉源太郎長男・秀雄に嫁す〕あるの故を以てにあらざる乎。第八東は浅野総一郎の女婿なり〔明治14年8月17日最初の妻・郷子(西園寺公成長女)と死別、24年4月23日浅野総一郎長女・松子と結納、翌25年2月12日婚礼²²⁾〕。……八東の如きは閥族に阿ねる所謂曲学の徒にして豈に憲法の神髓を解し得たる者ならんや」。

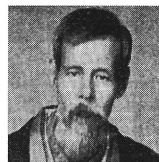
3 | 一方、明治23年8月留学から帰朝し法科大学教授となった梅謙次郎にも結婚話が舞い込んでいた。『原敬日記』同年8月27日条には「梅謙次郎を訪ふて元

老院議官津田^{つだいずる}出の娘を嫁入することを内談したり、是れは陸奥〔宗光。農商務〕大臣の内意に出たる事にて余は友人故に之を周旋せしに明日まで確答を延ばしてくれよと云ふ事なりしが、本日本野一郎来訪にて梅は今直に返答せよとあれば断るの外なけれども四五ヶ月延ばして宜しければ一考すべしとの事となりと申来れり、依て其旨陸奥大臣に内談せり²³⁾」とある。津田は^{くすのきまさのり}楠木正儀(^{まさしげ}楠木正成三男)後裔の名門で陸奥と同郷(紀州)の傑物であるから、この縁談は悪くない。だが、梅は同年12月1日旧松江藩士・松本理左衛門の娘・兼子と結婚する。松本家は出雲では名家で、兼子の祖母(とね)が梅の曾祖父(二代・道竹)の末妹であった関係から祖父(三代・道竹)が松江藩で取り立てられたのも松本家の権勢に負うところが大きい²⁴⁾。松本家は維新後没落した梅家にもおそらく援助の手を差し延べたろう。となれば「四五ヶ月延ばして宜しければ一考すべし」と答えた梅の脳裏には、穂積陳重と同様、恩義ある松本家から津田家へ乗換えの考えがよぎったか²⁵⁾。

〔外伝②〕

閥 閥

陸奥宗光(梅謙次郎に結婚話を持ち込んだ人)の最後の写真(阪崎斌『陸奥宗光』(博文館、1898年)口絵写真より)。



- 17) 鶴崎鷺城・前掲注15) 391-392頁。
- 18) 穂積重行『明治一法学者の出発——穂積陳重をめぐる』(岩波書店、1988年) 37頁。
- 19) 穂積重行・前掲注18) 54頁。
- 20) 穂積重行・前掲注18) 289頁以下。婿養子の身分のまま見合をするのはフライングだが、長尾龍一「八東の髓から明治史覗く」『日本憲法史叢書7』穂積八東集(信山社、2001年) 276頁が「陳重は実家(入江家)の妻を棄てての再婚である」と表現するのは、少々意地悪な書きぶりではある。
- 21) 法律新聞525号(1908年) 28頁。
- 22) 長尾・前掲注20) 305頁以下。
- 23) 原奎太郎(編)『原敬日記(第1巻・官界言論人)』(福村出版、1965年) 165頁。
- 24) 東川徳治『博士梅謙次郎』(法政大学・有斐閣、1917年) 203頁「備考」。
- 25) なお、津田の5人の娘のうち梅の花嫁候補と考えられるのは長女・品子であるが(ちなみに四女・珠子は梅の起草委員補助・松波仁一郎の妻となる)、「出が自ら『品女風に和漢の書を読み、兼て英仏独の学に通ず、其れ巧手象胥の技の如きは、特に其の土苴のみ』と誇ってゐる絶倫な才智と、稀な美貌の持主であった」彼女は、結婚話直後の「23年9月20日あはれにも咲く花の蕾のまゝに死んだ」。井上右『津田出の実行動王』(撰書堂、1943年) 393頁。

(しちのへ・かつひこ)